

## 「大自然のひろば」創世記

これは、次代をになう青少年を大自然の中にいざない、強く明るく幸せな成長を促した女性のプロフィールと「大自然のひろば」の開拓をたどる創世記です。

私たちのNPOのホームページが始まったとき、「大自然のひろば」のそもそもを知る唯一のメンバーとしてこの連載を引き受けましたが、資料の探索に手間取ってしまい、ようやくスタートすることになりました。

### 第1回 創始者のプロフィール 帰山祐子さん

昭和34(1959)年、オリンピックの東京招致に湧きながら子供たちの健全育成には手が回らなかった時代、地元池袋の氷川神社境内で「じぶんを愛するようにあなたの隣人を愛しなさい。」をモットーに青空保育園を始めた女性がいました。

その人柄を後の「みのり保育園」理事、勝田和子さんが次のように語っています。



・・・昭和34年7月の或る日から、氷川神社の境内に毎朝、小型のオルガンをそれもかなり重いのにせっせと運び入れて、楽しく弾いてくださる20才台の先生らしきお嬢様がありました。

遊んでいた幼児達は、そのまわりに輪になって嬉しげに珍しげにお遊戯をしたり、歌ったり、飼う者なき羊の群のようにあたりを走り廻って、見合わせる顔と顔がいつのまにか生き活きとしてきました。

そして、当時開局したばかりのフジテレビの歌のおねえさんも時間のある時は先生のお友達として加わって下さったのでした。

その頃、近所の子供達の通り道といえば、アサノセメントと書いた大型トラックが、うなりをたてて往復するすさまじい道で、そこをちょっと入ったところに唯一の遊び場、氷川神社の境内がありました。

そして、宮司さんのご理解もあったのでしょう、目にふれる近くの数か所に貼られた「3才以上のお子様をお預かりします。申込みを受け付けます」を知った親たちは、とにかく短い時間ではありましたが安心して預って頂くための申込みが続々とあられ、私もその中のひとりでした。

そのうちに、日本画家のお嬢様らしいよ。お父様の画いた絵なども売ったりなさって、少しずつ資金を用意なされているらしい、感心なお人だと近所の町会長さんからお聞きしたこともありました。

子供達を預かってくださるその方こそ噂の帰山先生！確かに日本画の帰山阡蒼画伯のお嬢様でした。

それから数年は春夏秋冬、境内の一隅に町会のテントを張って雨風をしのぐ青空保育園が始まりますが、これが現在の「みのり保育園」となって、みのり多い歩みを続けているのです。

しかし、園舎が出来るまでには諸々の難関を通らざるを得ません

でした。

地元のお父さんお母さん達、商店街の一軒一軒の方々が、我が事のように協力を惜しまず、少しずつ資金をあわせたり、資金よりも直接労力を惜しまず腕まくり、始めのうちは子供をおんぶして古新聞や空缶をリヤカーに積んで換金したり、氷川神社のお祭りにお店を出したりと、よくも力を合わせて此処まで実現に邁進されたものだと感じ入ります。地元の方々のお名前を挙げれば軒並み次々と、とても書ききれないでしょう。

子供たちの正しい成長を見守る愛のかたまりのような帰山祐子先生、その方針に共感と熱意を惜しまない保母先生方、スタッフの諸先生方、園の形態が整うと共に卒園生に向けたボーイスカウト東京292団も結成されたのでした。

「何でも、人にしてもらいたいと思うことは、あなたがたも人にしなさい」（新約聖書共同訳マタイによる福音書7章12節）の聖句を幼い日にみちびきながらその心にみのるようにと育てていただきました。そしてその伝統は今も変わることなく、現在の園長、斎藤玲子先生はじめスタッフの諸先生方によって一層現代にふさわしく受け継がれています。

けれども、帰山先生はすごい活躍をされるのに身体は割に病気が多く、暫くは静養のために信州の初谷温泉に逗留しなければならない時期がありました。

病後の身体を癒しつつ近くの山林を散策された時、国有林につづくまことに備えられたような土地にめぐり合い、都心の池袋に暮らす園児たちを、このような環境の中で山の空気を吸わせた、連れて来て山菜を採集したり山の生活をジカに味わう時を持たせたい！と強く希ったこと、これを実現させたのが「太自然のひろば」で、昭和55年のことです。

（「みのりのあゆみ」より）